

「ホワイトアウト」

真保裕一

紹介者：榎本博康

[紹介]

奥遠和ダムの水力発電所の運転員である富樫は、同僚の吉岡と共に雪山の遭難者を救助しようとするが、応援を呼びに戻る富樫が濃霧にまかれて道を失い、吉岡の死を招いてしまう。

吉岡の婚約者である平川千晶は、心の整理のためにも吉岡の職場を見たいと、許可を得て2月のダム発電所に向かう。

しかし、テロリスト達が丁度奥遠和ダム発電所を占拠し、24時間以内に50億円の現金を用意しろと要求する。千晶も所員達と共に人質になる。

だが富樫は屋外に出ていて人質を免れた。外界との通信は遮断され、唯一の道であるトンネルは爆破された。高山に囲まれた圧倒的な積雪の中、富樫の独りだけの闘いが始まる。



2000年発行の第25冊の表紙。腰巻が貼りついて下げられなかった。

[感想]

今年(2001年)の夏は格別に暑い。しかも関東ではカラ梅雨で、気温はすぐに体温を超えてしまうという。一方私の居る広島では避難命令が出るほどよく雨が降って気温が低く、やっと30℃を超える程度だ。去る7月13日は夜の9時なのに、羽田に着陸する前の高度千メートルでの気温が29℃との機内表示。地上では35℃という計算になる。思わずハイジャックして帰りたくなった。

さて、昔から人々はそんな酷暑の中で涼を得る様々な工夫をしてきた。その中でも特に優れた文化が「怪談」である。私も子供の頃に、ラジオ放送の講談でぞーっとする快感を楽しんだことがある。しかし最近ではエアコンとテレビが発達し、幽霊は鳴りを潜めた。

そんな夏のエンターテイメントとして、本書は昨年(2000年)に映画化されて、8月19日に封切られた。話は酷寒の2月の山中、ダムを占領したテロリスト達との闘いである。雪山の中をラッセルし続ける、凍てつくダムの内部で戦う、手足の感覚が無くなる。天候はあくまでも荒れて、ヘリも飛ばせない。映画ではなく、本を読んで話に没頭しよう。生命の危機に瀕する寒さの中だ。うまくのもりこめば、たとえ風のない真夏の快晴の午後の屋根裏部屋でも、汗ひとつかくでもなく過ごせるだろう。

この話は実に富樫が走りまわる。それを映画では織田裕二が演じるのだから、すごいことになっているのだろう。この撮影のせいもあってか、かれは椎間板ヘルニアで去年から今年にか

けて苦しんでいたが、快復したとの芸能ニュースを聞いた。富樫の闘い方はゲリラ戦であるから、地の利を得て先回りや待ち伏せで、人員や装備の差を克服し、勝機を得るものなので、移動が総てとも言える。

中盤の山場は、発電用水車の放水路を駆け抜けての、ダムからの脱出である。富樫はダムに閉じ込められたのだが、水を遮断して水車を止め、放水路を使って3キロメートル下流に出ようとする。テロリストがいつそれに気づくかが勝負だ。氷点下で水を被ると、衣服が凍りついて生命の危険にさらされるので、富樫は裸になって衣服をビニールで包み、自動小銃と拳銃、そして焚き火用に機械油に浸した凶面を持って走る。一方テロリストもモニタで水車の停止を知り、その目的を察知して、遠隔操作で起動をかける。走る彼の背後から、怒涛のような水音が追いかけてくる。

しかし、最後はスノーモービル同士の追跡劇、そしてダム湖の水面下を走る水中スクーターということで、生身の体での闘いから、機械力の闘いに変わってくる。やはり足による追跡では、話を展開しきれないのかと思った。どうしてもスピード感を増すには機械が必要だと。しかし、これは感動のエンディングへのお膳立てでもあるようだ。雪崩という自然の力も借りてテロリストに勝利した富樫は、千晶を救うために徒歩で、数キロの道のりをラッセルしながらその場所に向かう。テロリスト達はもう居ないので、自動小銃も何もかも捨てて、身一つで歩き続ける。この時、富樫は千晶ではなく、吉岡を救う幻影の中を歩いていた。

振りかえってみると、この話の中での富樫の走りは、常に銃などを持っていた。それがこの最後の歩行は、総てを捨てて、恐らくは自分自身の肉体も捨てて幻影の中を歩く。48時間近い闘争、その間彼を支えたものは何だろうか。走れメロスでは、走ることは友人を救う。ホワイトアウトでは、友である吉岡は既に死んでいる。彼の婚約者とはほとんど面識がない。同僚達が人質ではあるが、彼は8キロメートル下流のダムから状況を初めて外部に通報し、既に二人のテロリストも倒していた。もうやめて良かったのだ。

なぜやめなかったのか、それは自分の不注意で友人を死なせてしまったという、深い自責の念による。富樫はこれまで散々に苦しんできた。ここでもう一度、自分が行動しなかった結果としてまた千晶を死なせてしまったら、彼は自分を保つことができないだろう。深い心の傷が彼を動かし続けた。

(初稿2001. 7. 15)

[リバイバル感想]

私は山歩きは好きだが、冬山に行ったことがない。ここで言う冬山とは、簡単に言えば積雪のある山と言う意味であり、2000m級の山への冬季登山である。そんな怖い所には行きたくないという性格だ。だから冬季は低山のハイキングである。一度箱根外輪山(1000m級)を歩いたら、予想外に雪が降ってきたので、速攻で下山した。またある時の5月のGWに、奥秩父の金峰山(2,599m)に登ったところ、その時は晴れであったが日陰側には結構雪が残っていた。表面が凍っているので軽アイゼンを装着する。下山中に、上から大声がする。振り仰ぐと、女子学生のグループの先頭の体格の良い女性が滑落してくる。私の方は横に避けることもできそうだが、ここで止まらなければ彼女はかなり危険だ。しかし足場を考えても受け止めるのは極

めて難しそうだ。落下スピード次第で判断しなければいけない。どうする、どうするという時に、彼女は足を踏ん張って止まった。良かった。雪は部分的なので、岩を使って止まることができた。

しかし、その後のある年の夏の北アルプスである。天気は快晴、微風。五竜岳(2814m)を経て唐沢岳(2696m)からの下り道、白馬からの縦走も終わりに近く、スリル満点の岩場、鎖場も全てクリアして、あとは鼻歌気分で冷池山荘(つめたいけさんそう、2410m)を目指すだけであった。登山道は山の傾斜に従って下り、その末端で直角に左に曲がって平らな道になる。その最後の下りの一步を下したところ、足元の土が崩れて、私は一気に斜面を覆う礫(小石)に乗って滑落した。

知識として滑落した時は両足を踏ん張るという方法を知っていたので、足を踏ん張ることで滑落は止まった。ただ背中にザックがあるので、急傾斜の斜面に、重力に対して垂直に立っているような感覚だ。谷は深い。次に体が動き出したら一巻の終わり、広大な青空を一生の最後の記憶に留める。

まあ、青空の鑑賞を十分にしたので、次に周囲の状態を眼だけを動かして観察し、最もルートとして可能性の高い方向にじりじりと移動し、やがて元の道に戻ることができた。落下が止まってからの方が、はるかに恐ろしかった。

これ以降、墜落する感覚が、何の脈絡もなくたびたびフラッシュバックする。何らかの災害や犯罪に遭った人が抱く、トラウマの感覚が分かったと思った。そして一生ものとして大事にする他に無いと覚悟した。

(2021. 8. 22)